

胸に刻む 平和の重み

広島 記念式典

被爆の夫亡くした畑農さん（熊本市）

「生きてるうちに一緒に来たかったね」。被爆70年を目前に亡くなった夫の遺影を抱きしめた。6日、広島市であった平和記念式典。熊本市南区の畑農征子さん(77)は熊本県の遺族代表として参列し、平和の重みをあらためて胸に刻んだ。

【1面参照】



「生きてるうちに来たかった」



平和記念式典に参列し、慰霊碑に手を合わせる畑農さん家族。右から長女瑞穂さん、征子さん、長男正和さんと妻の春香さん＝6日午前、広島市の平和記念公園

喪服を焦がすような日差しが照り付けた。式典で、子どもたちの「平和への誓い」は命の大切さを訴えた。畑農さんは大きくうなずき、3月に誤嚥性肺炎で亡くなった夫和昭さん(当時82歳)の「あの日を思い浮かべた。和昭さんは中学1年のとき、爆心から約1.5kmの自宅でせん光を見た。爆風で家は吹っ飛んだ。父は倒れた柱の下敷きになり足を骨折し、母は腕にやけどを負ったが、和昭さんは奇跡的に無傷だった。1日かけて6〜7日離れた避難所まで逃げたという。

和昭さんは10年前から、パーキンソン病や脳梗塞で入院を繰り返した。闘病中の20

12年、小学校の同級生から原爆投下当日を振り返る手記集への寄稿を頼まれた。征子さんは「思うように手が動かなかったけど、病院のベッドで一生懸命書いていた」と振り返る。

家族にも被爆体験を語りたがらず、長男正和さん(48)と妻春香さん(45)＝福岡市、長女瑞穂さん(44)＝神戸市が「平和記念式典に行こう」と誘っても、「足が悪いので自信がない」と断った。どうしたら、和昭さんが広島に行きたいと

思ったろうか。3人で5年ほど前、和昭さんが被爆した場所などを訪ねた。ビデオに収録して回り、広島市立図書館などから集めた資料と一緒に渡した。「父は言葉には出さなかったけど、ずっと読んでいた。喜んでくれていたと思う」と瑞穂さん。式典前日の5日、4人で和昭さんが被爆後に避難した経路をたど

った。正和さんは父はどんな気持ちで逃げたのだろうか。暑くて大変だっただろう」と70年前の労苦をしのんだ。

被爆者の平均年齢は今年、80歳を超えた。「あと10年もすれば、被爆者のほとんどが亡くなってしまふ。無口な夫だったが、私は手記集や子どもたちを通して被爆を体験できた」と話す征子さん。慰霊碑の献花台に赤い花を手向け、家族4人でしっかりと手を合わせた。(西島宏美)